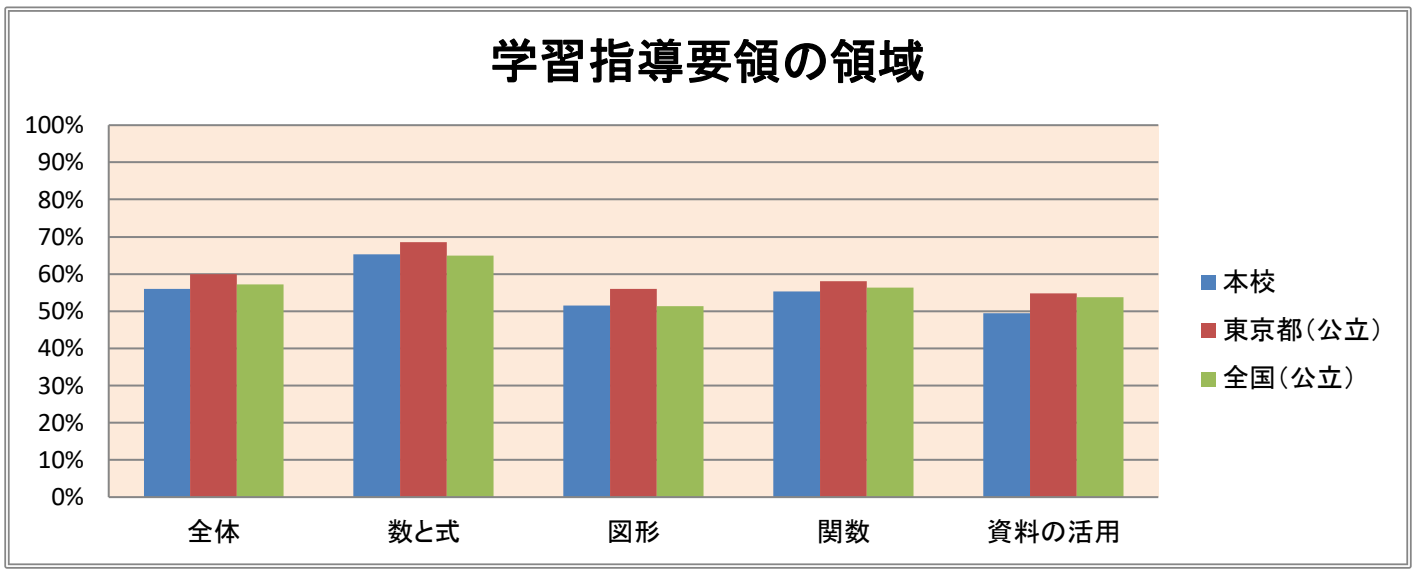
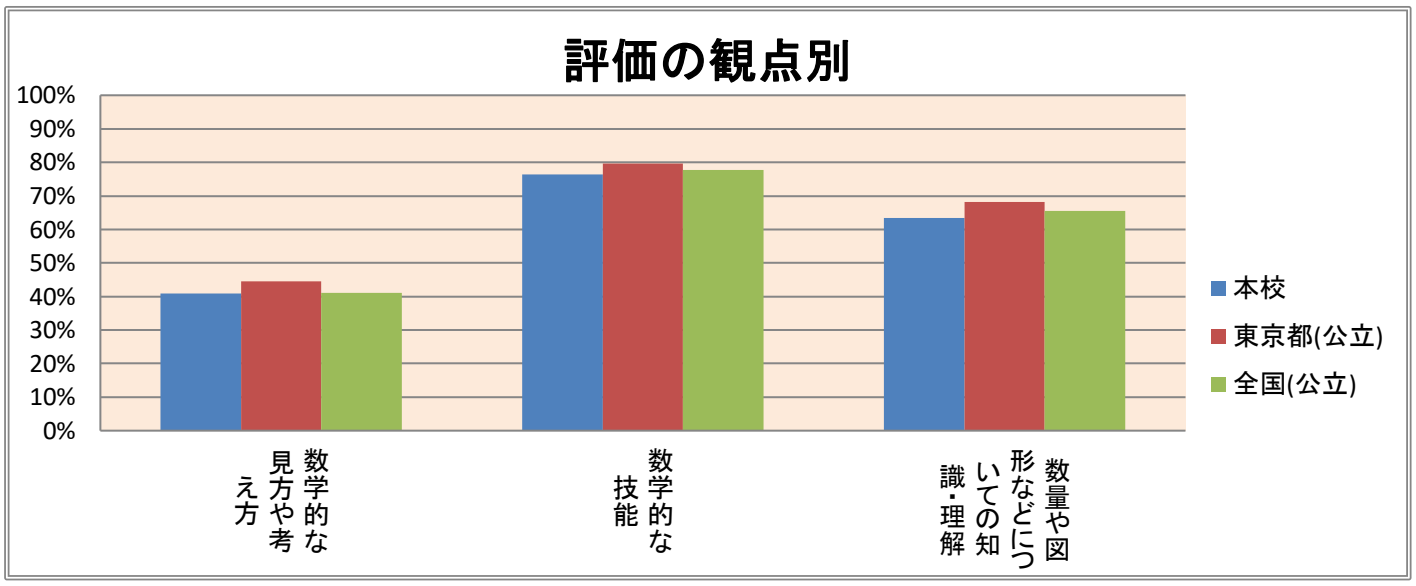
数学 （令和3年度　全国学力･学習状況調査）

江戸川区立上一色中学校

1．分類ごとの平均正答率





１．学習指導要領の範囲における正答率の分析・考察

【全体】

ほぼ全国平均と同水準になった。前回行われた2年前と比べると進歩はみられるが、まだ都平均よりは3～5%低い。領域としては資料の活用に落ち込みがみられるが、原因は1年生の3月に指導する予定だったが、休校のため指導できないまま残り、6月休校明けの分散登校期間中に、先の見通しが立たないまま短時間で終わらそうとしたことであり、今後対応する予定である。課題は都、全国に比べて無解答率が高い問題が多いことだ。理解できていない、または意欲が低い生徒が多いと考えられるので、補習等の対応が必要であると考える。

【数と式】

簡単な計算問題では、全国や都を正答率で上回るものもあり、計算力テスト等の成果がみられる。一方、文章を読んで式をつくる問題や、式を使って説明する問題などに苦手意識がみられる。コロナの感染状況をみて、授業の中で対話の機会を増やし、文章題により多く取り組ませていくことが必要である。

【図形】

図形に関しては都平均には及ばないが、半分の問題で全国平均を上回り、全体でもほぼ同水準である。傾向としては、全国や都と同様であるが、説明する問題や表現する問題の正答率が低い。数と式同様、授業の中で言語活動を積極的に行い、説明する場面、表現する場面を増やすことが対策になると考える。

【関数】

関数に関しても、都には及ばないが、全国とほぼ同水準である。1問だけ都や全国に比べて正答率が低い問題があったが、関数をことばで表現する問題であった。「関数」ということばの意味をきちんと理解していない可能性もあるので、一度これまで教科書に出てきた太字のことばについて、一通り確認する機会を設けることが対策になると考える。

【資料の活用】

【全体】で考察したように、1年生の3月に指導する予定だったが、休校のため指導できないまま残り、6月休校明けの分散登校期間中に、先の見通しが立たないまま短時間で終わらそうとしたことが、定着しなかった大きな要因であると考える。3年生の教科書の指導内容が終了したタイミングで、改めて指導しなおす予定である。

２．評価の観点別から見た課題

【数学的な見方考え方】

新指導要領では思考・判断・表現にあたる観点だが、都・全国と同様正答率は低い。本校の場合、ことばの理解に関する部分が弱点になっている可能性が高いので、授業の中での言語活動（特に互いに考えを説明する、他の人の説明を聞いて理解する）の機会を増やすことが一番の対策であると考える。また、考えを口頭だけでなく、記述することにより、表現する力を身に付けることも大切であると考える。

【数学的な技能】

全国と同水準で、都には及ばないが、２年前に比べると成果がみられる。今後も計算力テストなど基礎の定着に主眼を置いた取り組みを引き続き実施していく。ただ、全国や都より正答率が高かった計算問題で、無解答者率が全国・都の３倍以上あるなど、理解や意欲の低い生徒も少なからずいるので、補習等で理解を深め、意欲をもたせる取り組みも必要であると考える。

【数量や図形などの知識理解】

資料の活用の分野の問題が若干押し下げてはいるが、知識・理解の観点についても全国と同水準、都よりは若干低い位置と言える。これも基礎力アップの取り組みの成果の一つと言えるが、少し出題の仕方を変えるだけで分からなくなってしまう生徒も見られる。本当の意味での理解が深まるような復習の機会を設けることが必要である。

３．指導改善のポイント（上記のことをふまえて、具体的に記述する）

①計算力テストなど基礎定着のための取り組みを継続して行う。
②授業で対話的な時間を増やし、説明する能力などを高めていく。
③定着が不十分である単元については、改めて指導し直す。
④理解が不十分な生徒については、授業で時間的に厳しい場合、補習等で補う機会を設ける。